

海辺の告白

丹羽文雄

講談社

海辺の告白

昭和四三年一月一六日第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話東京九四二局一一一（大代表）

振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定価五八〇円

© Fumio Niwa 1968 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

宿敵	五
焚火	元
田舎道	四
海辺の告白	二〇
人生行路	二三
ひとりぼっち	二五
赤い三日月	二七
かね子と絹 きぬ 江 え	二〇
三人の妻	二七
花のない果実	二五
かれの女達	二五
危険な遊び	二五

装帧 田村孝之介

海 辺 の 告 白

宿

敵

虫が好かないという理由で、まさ江は最初から梅に好意を持たなかった。隣合って住むようになって、八年が経過した。表面はともかく、心の中では二人の女はたがいに敵意を抱きつづけた。

ともに寡婦であり、男女のちがいはあったが、双方にひとりずつ子供があった。似たような境遇であった。おなじような立場の女が隣合って住んでおれば、とくに親しくなるか、仇敵のように憎み合うか、そのいずれかであった。

ふたりとも永年、引揚者住宅に住んできた。もと陸軍の火薬庫だった建物を引揚者に転用したものであった。城西寮と呼ばれたが、倉庫を改造したものであり、むろん住宅には向かなかった。各戸ともに部屋がだだっぴろくて、天井が高く、隙間だらけであった。風のひどいときは、部屋の中で土ほこりが舞った。水道と便所は外部にあり、共同使用であった。電気も一棟に何アンペアと決められていたので、電気器具の使用は制限された。何ひとつ取得のない住居であったが、古い連中は終戦後から、新しいひとでも五、六年は住みついていた。住宅難ということも、大きな理由であったが、他にも理由があった。月に五百円にも満たない借家賃で

あり、制限されているだけに電気・水道料も安かった。第二の理由は、ここが政府のものであり、いずれは立退きが命じられる。老朽建物に指定されているこの住宅を、政府が都が取りこむ場合、住人には代替の住宅か、移転料が支給される。そんなとき十数年の居住権を有効に使い、出来るだけ良い条件で取引をする。それがこの住民たちの抱きつづけている希望であった。それだけの目的で、よそから、わざわざ住み難い城西寮に移ってくる連中がいた。

まさ江は十三年の、古い組であった。満州からの引揚者であった。二つになった娘の京子と良人の戸越庄造とまさ江は、からだひとつで帰国し、ここに入った。入寮して二年目に、戸越庄造を自動車の事故で失った。良人はアメリカ占領軍のジープにはねられて死亡した。占領期間中だったので、轢かれ損であった。以来、まさ江は娘とふたりで暮して来た。

津川梅は、引揚者ではなかった。ひとり息子の正と内縁関係にあった平利雄と三人で入寮したのが、八年前であった。それまで梅は、高い部屋代を払って、四畳半に住んでいた。近くにある城西寮の安い家賃と、ひろい部屋が羨ましくてならなかった。城西寮への入寮希望者は多かった。たまに空室が来ると、希望者の申込順によって、家族や家庭の事情が考慮された上で入居が許可された。許可するのは、ここを管理する大蔵省関東財務局でなく、都の住宅局でもなかった。三百世帯もある集団住宅なので、自治会があり、会の住宅部が入寮の許可をあたえた。梅は当時、城西寮の近くにある「とき本」という飲み屋で働いていた。「とき本」の常連に、塚田という男がいた。塚田は自治会の住宅部長であった。そんな関係で、梅の一家は優先的に入寮の便宜があたえられた。それがまさ江の隣室であった。

城西寮は二十近い二階建の棟があり、一ト棟には階上階下十室ずつという大きなものであつ

た。一室は約九坪あり、住人たちは各人の好みによつて仕切つて住んでいた。九坪といえば、六畳が三間程度もとれるので、アパートとしてはゆつたりしていた。まさ江は良人を失つてから、Kという製パン工場で働いていた。京子とふたりだけのくらしであつたが、夜勤もしなければ食べていけなかつた。給料の額よりも、食べるものがすこしでも自由になるパン工場をえらんだのには、それだけの理由があつた。働いている内は、おなじ棟の高木という老夫婦に娘を頼んだ。子供好きの老夫婦は、よろこんで京子を預ってくれた。隣室が空いたとき、まさ江はさつそく自治会の住宅部へ、会社の同僚の入居申込みをした。同僚というふれこみをしたが、女工の監督をしている井野という男のためであつた。井野は三十六歳で、細君に死別して、高校を卒業した弟とくらししていた。工場から一時間半もかかるアパートに住んでいたの、工場の近くの住居をさがしていた。まさ江は何となくやめぐらしの井野が気にかかるのだった。井野はまさ江を、他の女工員以上には見ていなかった。そのことを、まさ江は承知していたが、同じ棟で隣合つてくらすようになればというかすかなのぞみがなくもなかつた。井野も城西寮が気に入つた。そんなまさ江の希望に反して、隣室に梅一家が入居して来た。たとえ相手が梅でなくとも、まさ江は隣室の入居者に好意を抱くわけにはいかなかった。

まさ江は、骨太の、大柄な女であつた。三十三歳だが、髪を無造作に束ねて、化粧はほとんどしなかつた。大きな女という感じだけしかひとにあたえなかつた。それはまさ江の値打以下の印象であつた。

梅は、その反対であつた。からだつきがほっそりとしていて、いつも髪や化粧に気をつかつた。おなじ棟のひとたちは、梅の素顔を見たことがなかつた。梅は、三十歳であつた。水商売

の女だけに、あいそがよかった。そんな梅も、最初からまさ江には笑顔を見せなかった。まさ江の敵意が感じられたからである。

「なんだ、あの男、ろくでなしの、女のひもじゃないか」

と、まさ江は平利雄を軽蔑した。二、三日うちでぶらぶらしているかと思うと、毎日のように出かけていく。何をしているのか、よくわからなかった。定職をもっていないことは、たしかであった。まさ江は、梅一家が引越して来てから、隣室のようすに耳を傾けるようになった。

これまでのまさ江は、隣室の話しや気配には耳をふさいできたのである。が、今度はちがう。にくい敵のようすを知りたいと思った。隣室との境は押入れになっていて、使われている板は頑丈なものであった。あたり前なら隣室の物音は聞えないはずであったが、二階のまさ江たちの室は、天井が外されていた。焼夷弾が落ちたときのことを考えて、天井が外されたのである。住んでいるひとたちは、めいめいベニヤ板で天井を張った。破れ目や隙間が多く、隣室の物音は天井を伝って聞えた。まさ江は娘とふたりきりの生活なので、自分たちの話がだれに聞かれていようと平気であった。隣室に気がぬすることもなく、のびのびとくらしてきた。まさ江が隣室の梅一家に興味をもったのは、いつもその会話が夫婦の不和を語っていたからである。梅夫婦は、毎日のようにいい争っていた。原因は、利雄のギャンプルが主であった。競輪、競馬、マージャン、賭碁で、利雄は日をすごしているらしかった。たまには勝つこともあるが、結果は損の方が大きくて、そのしわよせが梅にかかってくるのである。あたり前の稼ぎでは間に合わず、ときには金のためにからだを提供するらしかった。そんなことまで、夫婦の

いい争いからまさ江は知ることが出来た。隣が不幸であればあるほど、まさ江は満足であった。いがみ合いが烈しくなればなるほど、まさ江は胸をひろげて、快哉を叫んだ。

ときには、腹の立つこともあった。争いばかりをしているわけではなかった。夫婦のいとも、いい争い同様に天井を伝って聞えた。梅が一ト晩かえって来なかったような翌日の夜は、利雄が梅を眠らさなかった。反動というのかも知れなかった。男は妻の不安に欲望をそえられるのか。いいわけの出来ない女の行跡は、男にいじめられることで何とか妥協がつくものか。そんなとき、まさ江はからだが固くなり、熱くなった。日日の労働でとり紛れていたものが、俄かに目をさまし、頭をもたげるのだった。まさ江は床に坐って、こわい顔をして隣室を睨んだ。

八年間、隣同士は表面だけは静かにすごして来た。

夏の夜であった。銭湯で昼間の疲れと汗をながして、まさ江はさっぱりとした気分になった。京子は夕食後、近所の広場で行われている盆踊りのリハーサルに出かけた。まさ江は電燈を消し、畳にタオルを敷いて、はだかになって仰向けになった。じっとしていると、すこしずつ風がはいって来て、快くなった。隣室も留守とみえて、静かであった。まさ江は両手をもり上った胸にのせた。両手の重みが、わすれかけていた本能を遠くから呼びかけるようであった。まさ江は闇の中で、溜息をついた。良人に死別して以来、異性に触れていない肉体を感じた。

そのとき、隣室の平利雄がかえってきた。扉に鍵がかけられているのを知って、舌打ちをした。競艇に出かけたので、締め出しをくらった。梅は夕方から子供をつれて、映画館に出かけ

ていた。利雄はめずらしく儲けたので、かなり酒をのんでいた。隣室のまさ江のところに鍵が預けられてはいしなかと、隣室をノックした。八年間、そんなことは一度もなかった。それに気がつかなかったのも、酔いのせいだったかも知れない。が、扉の音に何の答えもなかった。そのとき、まさ江はうとうと眠っていた。ノブをひねると、扉があいた。暗い室内であった。利雄は二、三度まばたきをして、室内のようすをたしかめた。月の光が射しこんでいた。利雄は、わが目を疑った。月光が、横たわっている裸婦を描き出した。青白い裸婦は、腰のものを一枚まとっただけで、美しくみえた。現実ばなれがしていた。利雄は扉につかまって、抵抗するように裸婦をみつめた。裸婦は動かなかった。酔いが一段とはげしくからだの中を駆けまわるようであった。それでも静かに扉をしめ、靴を脱いだあたりは、夢心地とばかりはいえないだろう。早く青白い妖精をとらえなければ、月光の中に消えうせるとそそのかされたように近付いた。利雄は口を利かなかった。まさ江のおどろきと抵抗は、形だけのものに終った。

——梅の鼻をあかしてやるのだ。

本能が満たされるかたわら、まさ江はすばやく計算をした。

その後、数回まさ江は要求に応じた。その都度、まさ江は復讐の快感を味わった。八年目にひとつのものを盗んだということが、男心を駆りたてるようであった。京子が友達と銭湯に出かけた隙をねらって、隣室の主人がまさ江のところに来た。そんなことをくりかえしていると、まさ江の室から出てくるところを梅に発見された。まさ江は、かくしているつもりはなかった。知られてもかまわなかった。むしろ知られた方がよかったのである。

「ぬすつと猫」

「なにを、売女^{ばだ}！」

と、二人の女は扉のところに立って、悪態をならべた。つかみ合いの喧嘩にならなかったのは、隣近所のひとびとが見物に出ていたからである。まさ江は、みっともないと思ったが、梅の鼻をあかしてやる快感に酔った。今後は梅に対して優越感が持てるのだった。

平利雄は、それを機会に梅のもとから去った。

「ほかに女が出来ていたのだよ。梅のところを出る絶好の機会だったのだ」

「すると、まさ江を利用したのかも知れないね」

隣近所の噂であった。

二人の女は、顔を合わせると、一層憎悪をたぎらせて睨み合ったが、口は利かなかった。子供同士も口を利かなかった。まさ江は平利雄に何の未練も感じなかったが、わすれていたものを思い出させられたことが残った。困ったことであった。

その後二年間、何ごとともなかった。梅は子供とくらしていた。男には懲りたようであった。

まさ江達の棟の右の端に、伊東という独身男が引越してきた。三十七、八で、実直そうな印象であった。月賦建築会社の外交員であった。外交員だけにあいそがよく、入居するとたちまち棟中のひとと親しくなった。伊東は、子供が好きだった。伊東の室へ、京子や正があそびに行くようになった。親の手許をはなれると、子供同士は親しくふるまった。親たちの憎悪の内容が子供たちに通じないせいもあった。はじめの内は、伊東の素性が噂になったが、棟内の面倒なことはひきうけてくれるし、子供を可愛がってくれるので、伊東の評判はよかった。梅や

まさ江には、伊東は年齢的にも適当な配偶者の位置にあった。二人の女は、何となくそういうことを感じていた。

「津川さんて、とても良いひとですね」

まさ江の気も知らずに、梅のことをほめるのだった。

「戸越さんて、なかなか感心な方ですね」

と、梅に向かってまさ江をほめた。

二人の女は、がっかりした。伊東の心がわからなかった。が、しばしば顔を合わせるのは、まさ江の方であった。伊東もまさ江も勤めは昼間であり、梅の勤めが夜であるので致し方がなかった。まさ江は梅が掛けていくと、毎夜のように京子を伊東のところへあそびにやらせた。形勢は、まさ江の方がいくらか有利にみえた。が、伊東の室には正もあそびに来ていたし、ほかの子供も来ていた。まさ江はさすがに自分で出向くことはしなかった。伊東は映画雑誌や、トラップ等、子供の好きな道具をそろえていた。伊東の留守のあいだも、子供たちの集会所のようになっていた。伊東は仕事に出かけるとき、扉に鍵をかけなかった。無用心な話だが、盗まれるようなものはなかった。古机に茶だんす、簡単な炊事道具、ふとん、柳行李一つであった。衣類らしいものは、下着類のほかほとんどなかった。

「お茶がはいったから、うちに来ませんか」

ある夜、まさ江は伊東を招待した。

「ありがとうございます」

伊東の室では、子供たちが騒いでいた。それがきっかけとなって、まさ江は伊東の部屋へ京